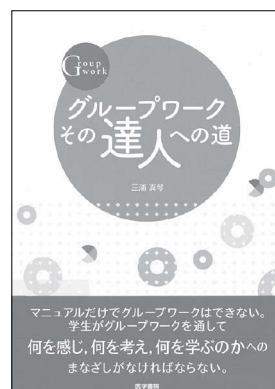


『グループワーク その達人への道』

学生の力を信じて、 グループワークに 取り組むための導きの書

著：三浦真琴／定価：本体 2,400 円＋税
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



学生の主体的な学びや社会的スキルを育むにはグループワークが効果的な方法の1つであり、看護教育の現場においても以前から熱心に取り入れられている。2012年中央教育審議会答申のなかで、高等教育改革のキーワードとしてアクティブ・ラーニングが明示され、具体的な学びの方法の1つとしてグループワークが提示された。しかしグループワークを行えば確実に目的が達成できるとは限らない。何のためにグループワークをするのか、どのようにグループワークを展開すれば学生の能動的な学習が促進されるのかを考えて行うことが重要である。

本書には、著者の長年の経験をもとに学生の学びを促すグループワークのしかけが多数紹介されており、実践に役立つものばかりである。しかし、本書はいわゆるマニュアル本ではない。著者は、「グループワークの進歩や学生の成長を願うのであればマニュアルでは功をなさない。大切なのはグループワークを通して、その時その場で学生が何を感じ、何を考え、何を学んだかである」と、グループワークのノウハウに先立って philosophy がなくてはならないと述べている。

本書は8章から構成されている。第1、2章はアクティブ・ラーニングを正しくとらえる土台として、協同学習、PBL、協調的学習の本来の考え方について説明されている。第3～6章は、学生

がグループワークを進めるうえで注意すべきことに気づき、グループワークの意義や価値について理解できるよう授業の進度に応じて、ゲーミフィケーションの要素を取り入れたワークが数多く紹介されている。第7章は、学生のモチベーションを維持するための工夫、第8章は学生と教師の意思疎通・情報共有のあり方について述べている。

また、執筆協力者である水方智子先生(松下看護専門学校)による column は実践例として理解しやすい。「転ばぬ先の杖は与えすぎない」「教えない勇気をもつ」という教員間での共通認識のもと教育改革が進められ、その状況において学生がどのように変化(成長)したのかという、能動的学修の成果が伝わり、教育の喜びが感じられる。

「授業では手取り足取りしないけど、そうではないところで学生を信じ見守るそのようなスタンスは不可欠である。特に医療従事者をめざす学生が、あたたかな配慮や広きに届くまなざしに包まれているという感覚、包まれる体験は、将来の医療行為における姿勢やスタンスを形作るための重要な基盤になる」という著者の考えは非常に説得力がある。本書の根底に流れるのは一貫して、学生の成長を望み、学生を信じる著者のあたたかな深いまなざしである。

学生の成長を願いグループワークを展開されている多くの人にも読んでいただきたい一冊である。